

東北大学大学院文学研究科・東北大学総合学術博物館 地底の森ミュージアム共催企画

企画展

アジアのなかの 東北日本旧石器時代

展示図録



東北大学大学院文学研究科
東北大学総合学術博物館
仙台市富沢遺跡保存館 地底の森ミュージアム

アジアのなかの 東北日本旧石器時代



例言

- ・本書は東北大学大学院文学研究科、東北大学総合学術博物館、地底の森ミュージアム共催企画展「アジアのなかの東北日本旧石器時代」の展示図録である。
- ・図録掲載資料は、展示構成資料の一部である。
- ・企画展開催に当たり、下記の機関より多大なるご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。

静岡県埋蔵文化財研究所、栃木県佐野市、郡山女子大学、仙台市教育委員会

企画展情報



東北大学大学院文学研究科・東北大学総合学術博物館 地底の森ミュージアム共催企画
企画展「アジアのなかの東北日本旧石器時代」
期間：平成28年10月14日（金）～12月18日（日）
会場：地底の森ミュージアム企画展示室

関連行事

公開学術講演会

平成28年11月26日（土）14:00～16:00
講師：ペ・キドン氏（韓国漢陽大学校教授）
会場：太白区中央市民センター3階大会議室（たいはっくる内）

ギャラリートーク

平成28年10月15日（土）14:00～15:00
担当：地底の森ミュージアム学芸員
会場：地底の森ミュージアム企画展示室

ごあいさつ

この企画展では、東北大学が所蔵する後期旧石器時代の資料を中心に展示し、それらを同時代の東アジアの資料と比較します。東北日本の旧石器文化をグローバルな視点から見つめ直して文化交流を考えると共に、最新の研究情報を紹介します。

目次

1. プロローグ	2
ホモ・サピエンス以前の石器	2
2. 後期旧石器時代のはじまり	3
環状ブロック群	5
落とし穴	6
3. 石刃技法と非石刃技法の展開	7
石刃技法の展開	7
石器に現れた地域性	11
剥片尖頭器の広がり	11
国府石器群の分布	11
4. 細石刃石器群の出現と展開	15
荒屋型彫刻刀形石器の分布	15
5. 土器の出現と縄文時代への移行	19
土器の出現と狩猟具の変化	19
縄文時代への移行	22
6. エピローグ	27
私たちの能力	27
英文概説	29
展示資料一覧	33

展示資料出土遺跡の位置



1 プロローグ

ホモ・サピエンス以前の石器

ユーラシア大陸東部には、前期旧石器時代の石器が残されており、約 50 万年前の周口店遺跡から出土した北京原人は有名です。彼らは、大型の剥片石器を使っていました。中期旧石器時代になると、ユーラシア大陸西部ではルヴァロワ技法*がみられ、その分布は中国・モンゴル・ロシアの接するあたりまで確認されています。それよりも東では独自の文化がみられました。

※ルヴァロワ技法：ヨーロッパ・西アジアなどで、後期旧石器時代以前に見られる石器の作り方です。石を割って亀の甲羅のような形に整え、そこから目的とする剥片を打ち割る方法です。



2 後期旧石器時代のはじまり

約 20 万年前、アフリカに生まれた現生人類（ホモ・サピエンス）は世界各地に移動し、石器を作り、生活をしていました。日本列島では、3 万 6 千年前頃から人々が生活した跡（遺跡）が見つかるようになり、後期旧石器時代がはじまります。この頃の日本列島では「環状ブロック群」、「局部磨製石斧^{※1}」、「落とし穴」の存在が特徴的で、東アジアのなかでも独自性の高い文化を持っていました。

約 3 万 6 千～3 万年前の日本列島には、2 種類の特徴的な剥片石器^{※2}がみられます。一つは小さな石のかけらを台形のような形に整えた「台形様石器」で、もう一つは縦長で両辺が並行な形のかけら（石刃）から作る「ナイフ形石器^{※3}」です。これらは石器が特徴的にまとまってみつかると、環状ブロック群でも多く出土しています。

※1 局部磨製石斧：刃の部分だけが磨いて作られている斧形の石器です。磨いて作るという石器の作り方は、旧石器時代には世界的にはほとんど認められていません。

※2 剥片石器：石のかたまりを打ち割ってできたかけら（剥片）に、刃を作るなどの加工をしたものを剥片石器と呼びます。

※3 ナイフ形石器：現代のナイフに似た形をした石器の総称で、刺したり、切ったりするために使われました。



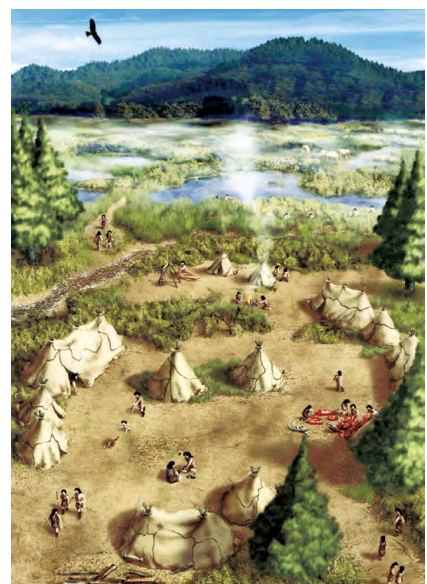
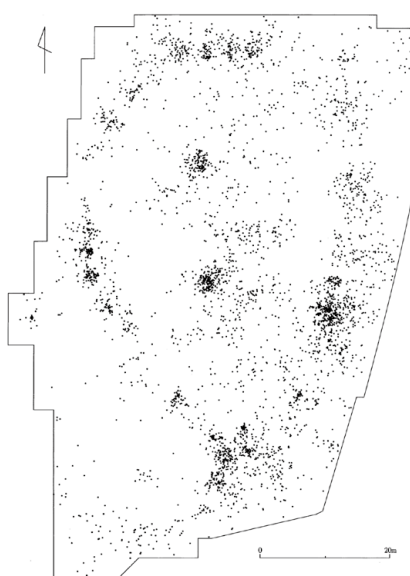
環状ブロック群（約3万5千～3万2千5百年前）

石器や石のかけらが直径数メートルの範囲にまとまる状況（ブロック）がいくつもみつき、全体で直径数十メートルの環のようになったものを、環状ブロック群と呼んでいます。関東地方で多く、狩猟や集落など大勢の人々が集まる場であったことを示すと考えられています。また環状ブロック群から多く出土する局部磨製石斧は、木を切る・動物の皮を加工する道具とみなされています。どちらも東アジアではほとんど例がありません。



環状ブロック群の分布

橋本勝雄 2005「環状ユニット（環状ブロック群）における石斧の諸相」『日本旧石器学会第3回講演・研究発表シンポジウム予稿集 シンポジウム 環状集落—その機能と展開をめぐって』日本旧石器学会 をもとに作成

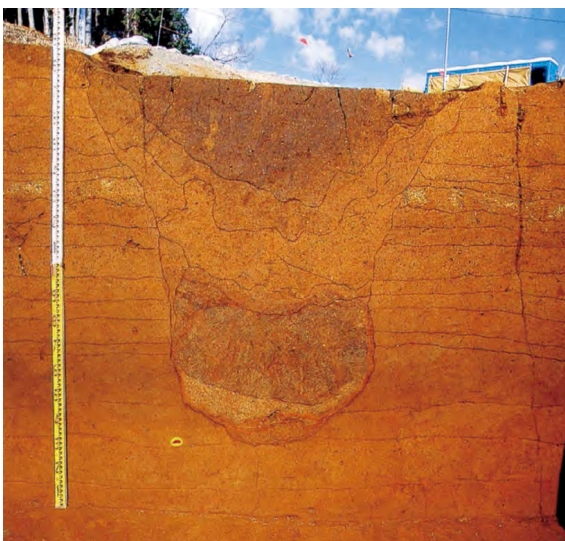


環状ブロック群の例（栃木県佐野市上林遺跡）

【左】石器の出土状況（点1つが石器1つ）【中央】出土した石器 【右】推定される当時の様子
図・イラストは 佐野市教育委員会より

落とし穴（約3万2千年前）

落とし穴は、罾を用いた狩りがすでに行われていたことを示しています。静岡県富士石遺跡では、始良 Tn 火山灰の下層から、落とし穴が一行に並んで検出されました。深さは 1.5m 程で、直径 1m の円形の穴です。当時、落とし穴の周辺は、ネザサ類などの植物が茂っており、落とし穴の開口部が見えにくい状況になっていたと考えられます。落とし穴は南九州など暖かい地域で多くみつき、東アジアにはみられません。



静岡県富士石遺跡でみつかった落とし穴

【上】列状にならんだ落とし穴 【左下】落とし穴の断面 【右下】横から見た落とし穴
写真は（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所より

3 石刃技法と非石刃技法の展開

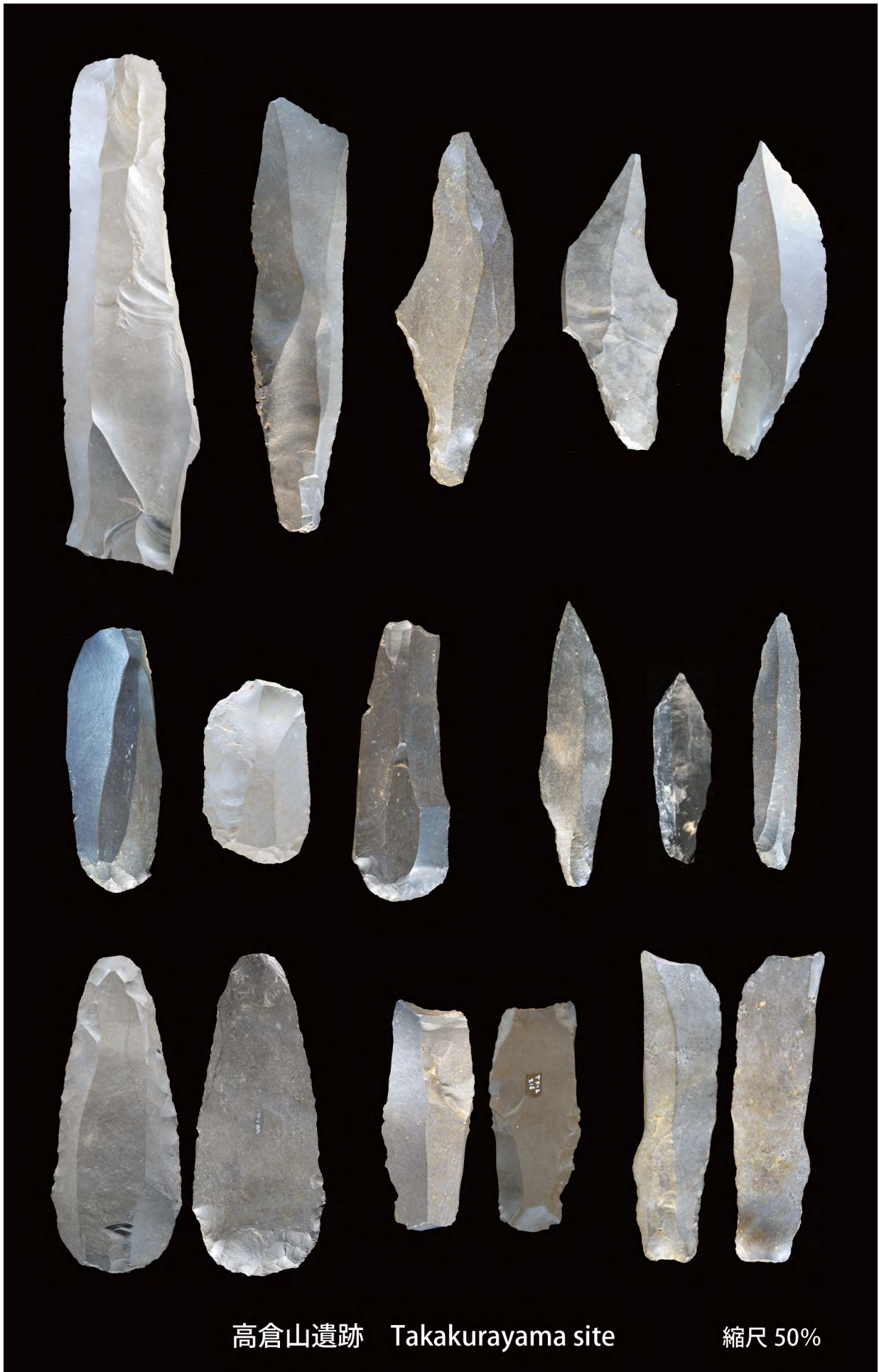
石刃技法の展開

1 個の石から何枚も石刃を割り取る石器の作り方「石刃技法」は、ヨーロッパやアジアなどの広い範囲にみられ、ホモ・サピエンスが拡散した証拠と考えられています。東アジアでは、4万～5万年前頃から石刃がみつかっています。石刃を加工して作った「ナイフ形石器」「剥片尖頭器※¹」「エンド・スクレイパー※²」など、中国や韓国の遺跡でよく似た形のもので出土する一方、ナイフ形石器の多様な形状と数の多さは、日本の独自性です。

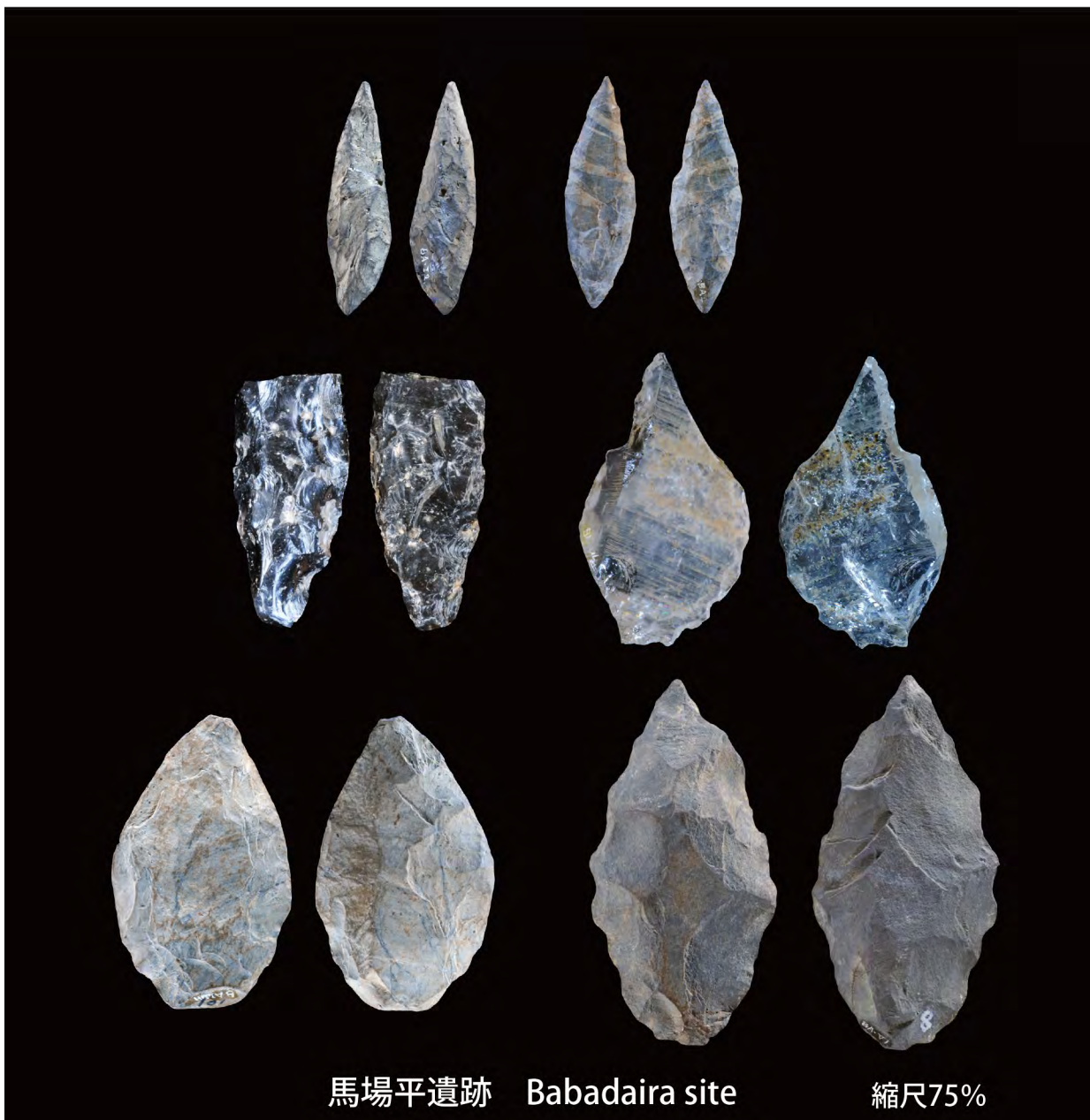
※1 剥片尖頭器：細長い形をした石器で、一端は尖り、その反対は棒状に形作られています。棒状の部分は柄に取り付けたとされ、やり先につけた石器です。

※2 エンドスクレイパー：剥片の端を丸い形に加工し、そこに分厚い刃を作り出した石器です。動物の皮の脂をかき取る道具と考えられています。









石器に現れた地域性

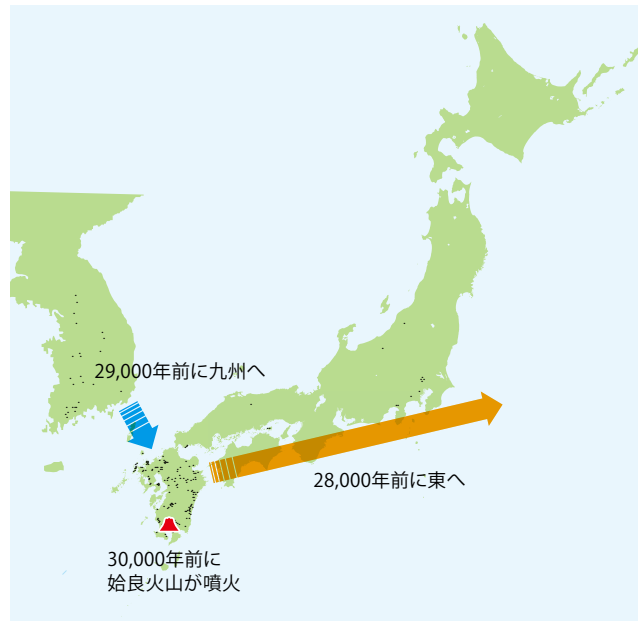
石刃技法によって作られた石器が、東日本で多くみられるようになる頃、瀬戸内周辺では横長の石のかけらを材料にして作る「国府型ナイフ形石器」、九州では先端の尖った石器「剥片尖頭器」が盛んに作られます。約3万～2万年前にあたるこの頃は、日本列島内でも石器の特徴に明確な地域性が認められます。

剥片尖頭器の広がり

約3万年前、鹿児島県の火山（始良火山）が大噴火しました。噴出した火山灰「始良Tn火山灰」より上の地層から出土する石器には変化がみられます。韓半島で多く出土する「剥片尖頭器」が、九州地方でもみられるようになるのです。噴火によって動物や植物などの生育環境が大きく変わり、韓半島から九州へと人が移ってきたことを示しているのかもしれませんが。

剥片尖頭器の広がり

日本旧石器学会 2010『日本列島の旧石器時代遺跡』、西都原考古博物館 2012『人の来た道―東アジアの旧石器時代と宮崎』を参考に作成

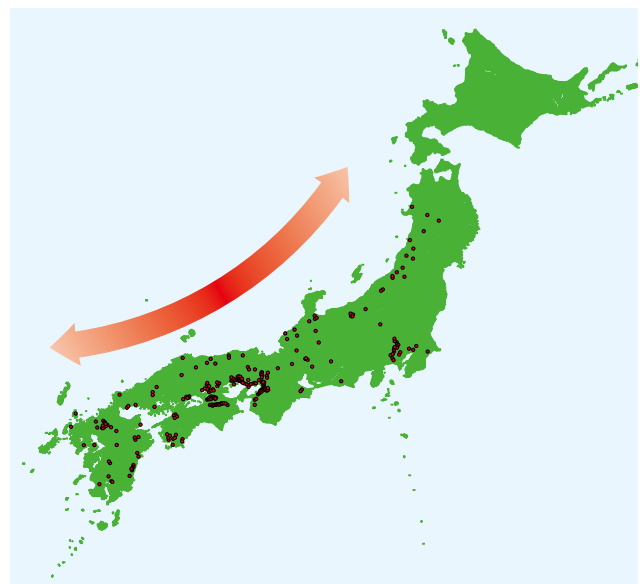


国府石器群の分布

瀬戸内地方に多くみられる特徴的なナイフ形石器は、「国府型ナイフ形石器」と呼ばれており、同様の特徴を持つナイフ形石器は東北地方でもみつかっています。また「国府型ナイフ形石器」は「剥片尖頭器」と一緒にみつかるともあります。これらの石器を作り使う人々が、東日本まで移動してきていたと考えられます。

国府型石器の分布

森先一貴 2010『旧石器社会の構造的変化と地域適応』六一書房をもとに作成









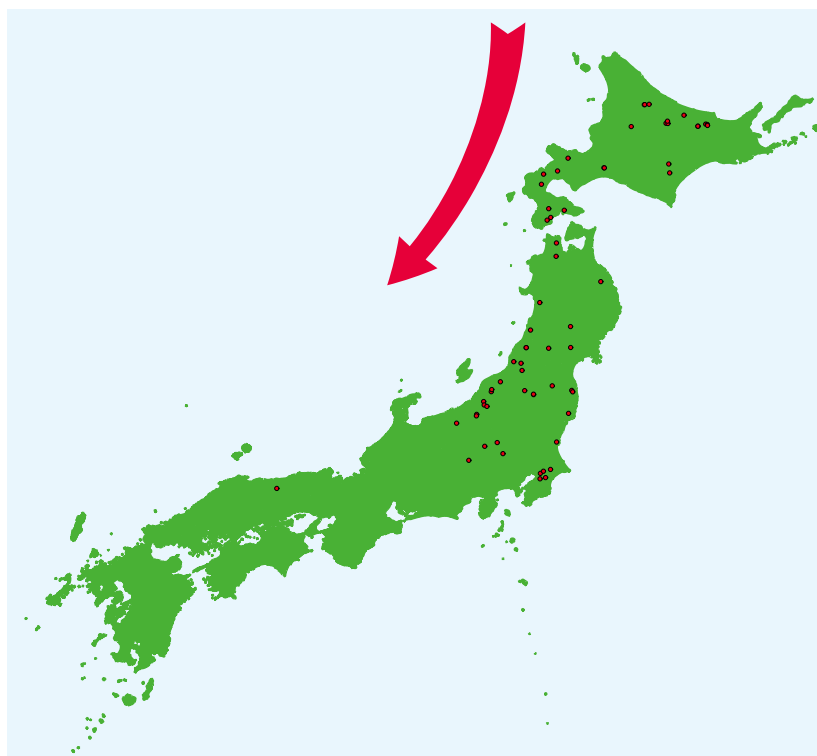
4 細石刃石器群の出現と展開

3万～2万年前頃のシベリアや中国、韓国の遺跡では、非常に小形で細長い石器「細石刃」がみられます。同様の石器は、海面低下によって大陸と陸続きになっていた北海道では約2万4千年前の遺跡からみつかっています。北海道では細石刃が出土する遺跡が多い一方、本州から九州ではあまり多くなく、もっとも古い例も1万9千年前頃です。石器の特徴から、シベリアから北海道を経由して東北日本に渡ってきた人々がいたと考えられます。

1万8千～1万5千年前頃の北海道の遺跡でみつかった細石刃を研究した結果、遺跡によって細石刃の特徴が異なっており、作り方や手順などに特定のパターン（技法）があることが分かってきました。1万8千年前頃の本州から九州の細石刃には、北海道とは異なる特徴がみられますが、しばらくすると北海道と共通した細石刃が東日本に定着します。細石刃という石器はアジアで共通するものの、地域によって作り方に違いがあり、各地で技術開発が進められたことがうかがわれます。

荒屋型彫刻刀形石器の分布

「荒屋型彫刻刀形石器」は、骨や角を加工して道具を作るための石器です。この石器の分布は、サケやマスなどの魚が天然で遡上してくる範囲に重なり、また遺跡も大きな川が合流するようなどころで多くみつかります。川などで漁を行っていたと考えられます。



荒屋型彫刻刀形石器の分布
堤隆 2011『最終氷期における細石刃狩猟民とその適応戦略』雄山閣 をもとに作成





タチカルシュナイ遺跡群 Tachikarushunai sites

縮尺 75%



5 土器の出現と縄文時代への移行

土器の出現と狩猟具の変化

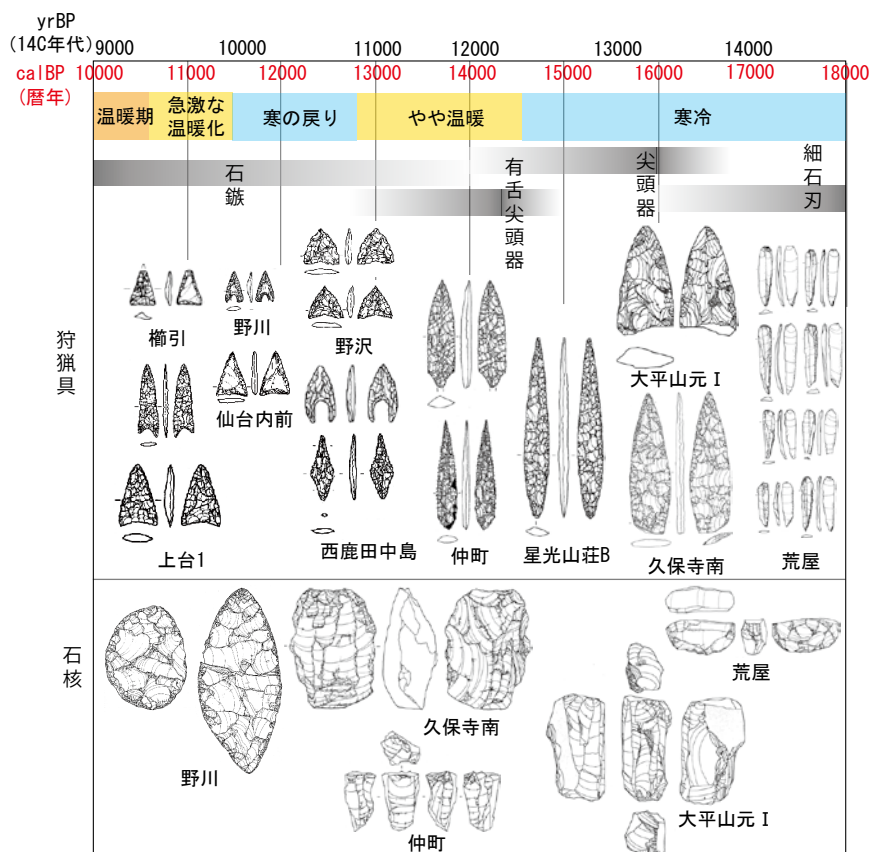
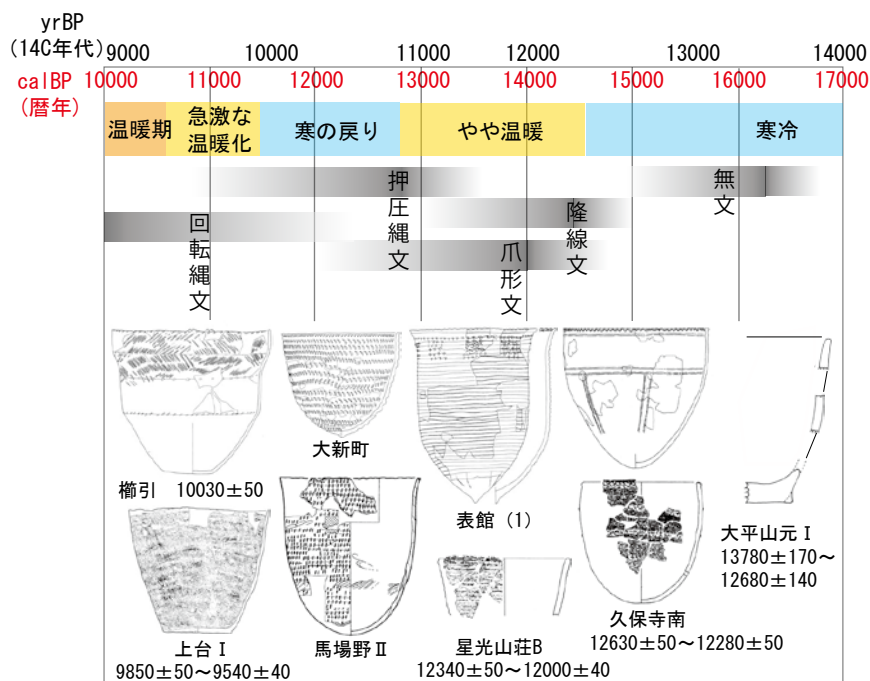
現在、世界最古の土器は中国大陸や日本でみつかっており、1万6千年前頃のもので、本州から九州では比較的温暖な1万4千～1万2千年前に土器が増え、北海道では1万年前以降に増加します。土器が出現する頃の北海道や九州などでは、旧石器時代の伝統をもつ石刃や細石刃などの石器もみついています。一方、本州では尖頭器や石斧、有舌尖頭器※など旧石器時代とは異なる特徴を持つ石器が多くなります。

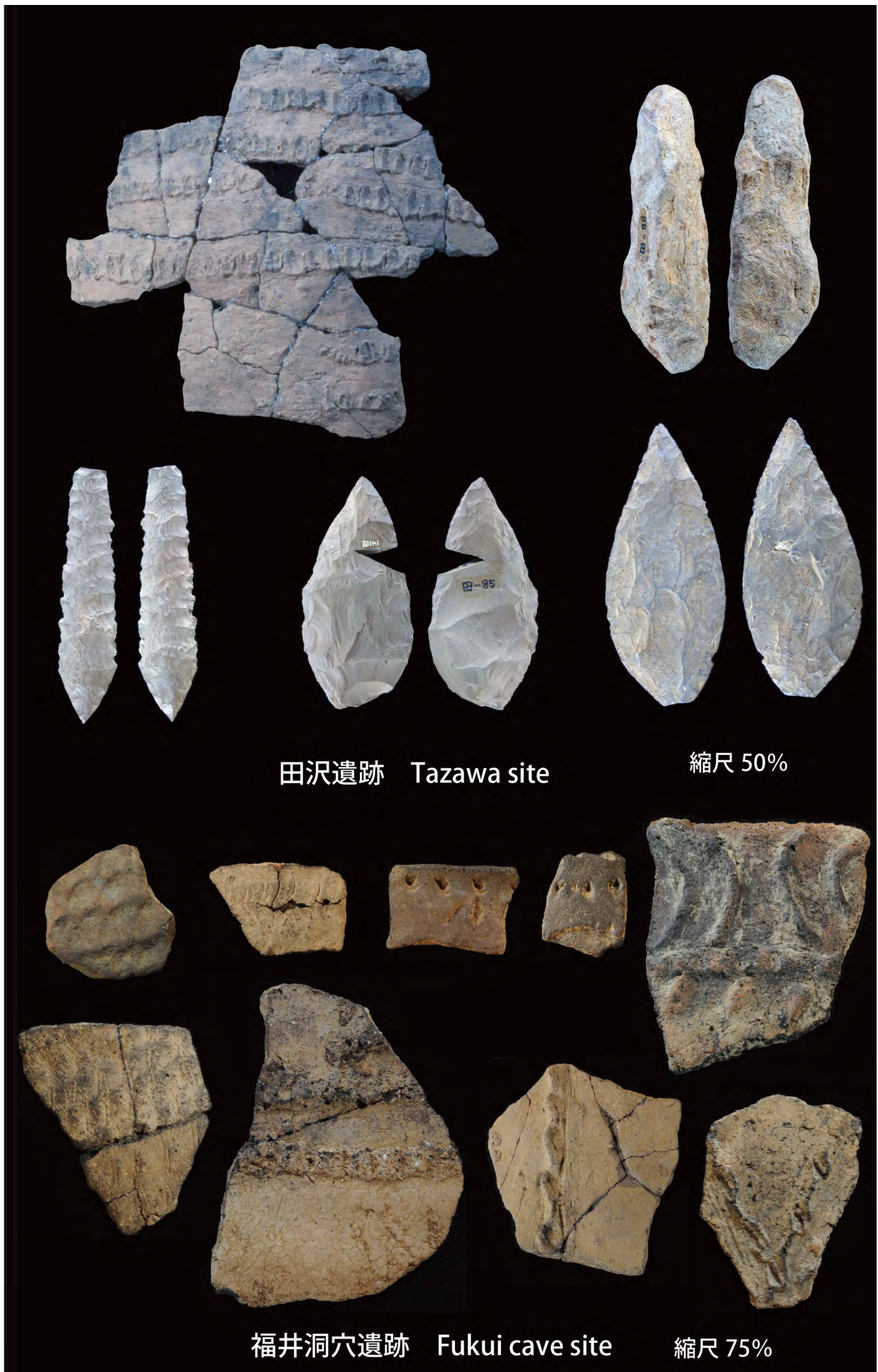
※有舌尖頭器：柄に取り付けるための部分が作り出された、細長い形の尖頭器です。後期旧石器時代終わりから縄文時代初め頃に特徴的にみられます。

【上】出現期の土器の変遷

【下】石器の変遷

鹿又喜隆 2015「地球温暖化と縄文的適応へ」『北の原始時代』吉川弘文館より







縄文時代への移行

土器が盛んに用いられるようになる頃、人々は竪穴住居を作るようになります。定住的な生活が始まり、食べ物を蓄える貯蔵穴や屋外の炉（集石遺構）も、住居と一緒にみつかります。約1万6千年前の土器出現から、定住的な集落が列島全体で展開する約1万年前までの6千年間は、縄文時代草創期と呼ばれます。この時期は、旧石器時代からゆるやかに縄文時代へと移り変わっていった期間です。







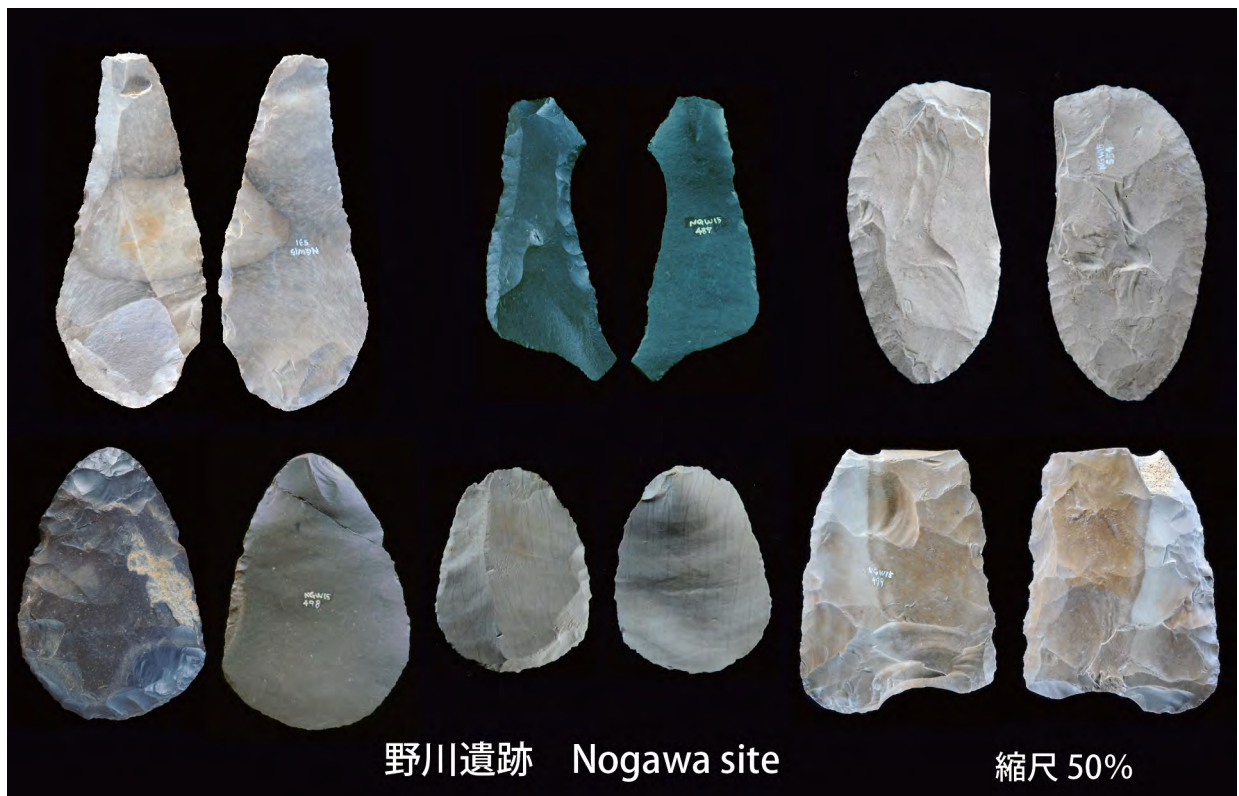
5. 土器の出現と縄文時代への移行



仙台市野川遺跡

【上】 竪穴住居の可能性のある穴【下】 穴に入れられていた石器

写真は東北大学考古学研究室（上）、仙台市教育委員会（下）より





野川遺跡 Nogawa site

縮尺 50%

6 エピローグ

私たちの能力

私たちホモ・サピエンスは、抽象的なことを理解し想像し、計画的に物事を考える能力を備えています。その能力が、絵画や音楽、文字、装飾品などを生み出しました。日本で発見されているものは多くありませんが、2万8千年前の大分県岩戸遺跡のコケシ形石偶や、1万5千年前の長崎県福井洞穴の有孔円盤を代表的な芸術作品と見ることもできるでしょう。また、彼らは複数の材料を組み合わせることで道具を作れるようになりました*。細石刃をはめ込んだ槍先や銚先は、その実例です。

*証拠の一つとして矢柄研磨器があります。これは砥石の一種で、中央に直線的に通る断面半円形の溝が特徴です。溝の部分で矢の柄を整えたと考えられています。





The Paleolithic Age of Northeastern Japan in Asian Perspectives

Summary of Exhibition

1. Introduction

This exhibition mainly displays archaeological materials excavated and curated by Tohoku University, Graduate School of Arts and Letters. They belong to the Upper Paleolithic and the Incipient Jomon period up to the emergence of pottery. The Upper Paleolithic period is the latter part of the Old Stone Age and the age of fully modern man that is *Homo sapiens*. Modern humans emerged in Africa at around 200,000 years ago and spread rapidly throughout Eurasia and Australia by 40,000 to 50,000 years ago.

In the Japanese Archipelago as well, thousands of archaeological sites were formed after the advent of the Upper Paleolithic. There are similarities and differences between regions within the Archipelago, the former representing vast movements of human groups and their cultural exchanges, while the latter reflecting regional adaptation processes to the environment. The exhibition explains variabilities of stone tools of Japan in relation to those in Mainland Asia.

The organizers: The Tomizawa Site Museum
Tohoku University, Graduate School of Arts and Letters

The Tohoku University Museum

October, 2016

2. The beginning of the Upper Paleolithic Period

In the Japanese Archipelago, the Upper Paleolithic sites began to appear at around 36,000 years ago. During the Initial Upper Paleolithic period, some cultural characteristics are rather unique to Japan in relation to continental Asia, such as “circular arrangements of lithic concentrations”, “edge-ground axes/adzes”, and “pit-fall trap features”. There were two groups of flake tool types in the Archipelago before 30,000 years ago. Namely, they were “trapezoidal flake tools” which were secondary retouched to the shape of trapeze, and “knife-shaped tools” which were made on blanks of elongated blades with parallel sides.

Sites with large ring-shaped arrangements of concentration of stone tools (called circular block group sites) are found especially in and around the Kanto plain area. These sites are considered to have been the location of gathering of large numbers of hunters and settlement people. The edge-

ground axes/adzes were probably tools used to work wood and animal hides. The circular block group sites or partially ground stone tools are not found in continental Asian countries.

Pit-fall traps were used for hunting game animals since the early half of the Upper Paleolithic in central to southern parts of the Archipelago. The panel shows lined pit features discovered under the AT (Aira-Tanzawa tephra) at the Fujiishi site, Shizuoka Prefecture. Paleolithic pit-fall traps are found in warmer areas such as Kyushu, but they are not excavated in the Mainland Asia.

3. Development of blade techniques and regional differences

The blade technique which is a method of producing long elongated thin blanks consecutively from prepared blade cores is considered as hallmark of the spread of modern humans. In East Asia, the production of blades began around 40,000 to 50,000 years ago. Products of blade industries (blade based stone tools) such as “knife-shaped tools”, “stemmed flake knife-points”, and “end-scrapers” are also found in continental Asia, while abundant variabilities of “knife-shaped tools” are rather distinctive characteristics of the Japanese Archipelago.

Regional variabilities within the Archipelago were predominant during the period between 30,000 and 20,000 years ago. The wide spread volcanic ash of AT is a chronological key marker tephra throughout Japan, which was erupted from the Aira volcano, in southern Kyushu at around 30,000 years ago. After the event, more local differences are observed nationwide, such as blade based knives in Tohoku, various knives in Kanto, side-blow wide blank knives which are called “Kou-type” (some on display here) especially in western Japan using andesite lithic materials, and stemmed flake knife- points in Kyushu Island. The last type has common characteristics with stemmed point tools in Korean peninsula. It is suggested that environmental changes caused by the big volcanic eruption brought wider waves of human migration and cultural exchanges.

4. Composite tools: microblade industry in Asia and Japan

A distinctive type of “microlith” (minute stone tool) is “microblade” in East Asia. Microlith was a pan-Eurasian phenomenon including European countries toward the end of the Paleolithic era. The Asian “microblade” cultures spread in such areas as Siberia, China, Korean peninsula around 30,000 to 20,000 years ago. The tiny elongated artifacts were parts of a composite tool which was used as hunting weapon. The small tools were inserted into the shaft part of organic materials, as displayed here for Mesolithic microblades found in Denmark.

In Hokkaido, microblade assemblages were found in sites about 24,000 years ago. The Hokkaido Island then was a part of the Asian continent due to the lowered sea level during the Last Glacial

Maximum period. A number of microblade sites are discovered in Hokkaido, but sites in Honshu to Kyushu are less frequent for the period, the oldest one was 19,000 years of age. Characteristics of stone tools indicate that there were human migration waves from Siberia to Tohoku Japan, by way of the Hokkaido “peninsula”.

There are great variabilities in microblade production technique within Hokkaido during the period from 18,000 to 15,000 years ago. The end products of microblade were fabricated by different methods of preparing microblade cores and detaching techniques which are also experimentally reproduced. Production techniques similar to Hokkaido gradually spread to eastern parts of Japan. The microblade industry was a common cultural trait throughout Asia. However, regional variabilities in actual production techniques may reflect adaptive strategy and population difference.

A particular kind of stone tool is the “Araya type burin”. The type of burin is widely found in northeast Asia, In eastern Japan, broad distribution patterns of this type of tool often on river confluence points indicate fishing activities for subsistence along inland streams.

5. Emergence of pottery and the end of the Paleolithic world

The oldest pottery in the world is found in Japan and China mainland which are dated to 16,000 years ago with calibration. From Honshu to Kyushu, the frequency and amount of pottery increased during the period between 14,000 and 12,000 years ago when the climate was relatively mild. In Hokkaido, pottery increased after 10,000 years ago. The lithic industry includes such new elements as bifacial projectile points, adzes or axes, and tanged points, while in Hokkaido traditional Paleolithic types of tools remained, including blades and microblades.

Transition to the Jomon Age took a long time throughout the Archipelago. After the first emergence of ceramic technology at around 16,000 years ago to the overall development of sedentary settlements with pit dwellings, storage facilities, outside hearths with cobbles, and coastal shell middens at around 10,000 years ago, the era is named as “the Incipient Jomon period”. The Incipient Jomon was a time of gradual cultural transformation toward the Japanese version of the “Post Pleistocene adaptations” which formed the basis of contemporary island cultures along the eastern periphery of the East Asian world.

6. Epilogue

We all belong to one species, *Homo sapiens*, and our ability to understand abstract concepts and think the future with planning depth dates back to the Upper Paleolithic period. The ability brought us artistic drawings, music, personal ornaments, and writing systems with civilizations. In Japan, not

so much evidence is found to testify the ability for symbolic behavior. Some artifacts on display here, such as clay and stone discs from the Fukui cave site, Kokeshi doll shaped figurines from the Iwato site, and an arrow-shaft smoother from the Nogawa site express symbolic and carefully planned behavior patterns of our ancestors.

The global warming at the end of the Ice Age was a natural phenomenon which demarcates the end of the Paleolithic. We at the present world are facing another global warming. The scientific name of us is the human with wisdom, and we need to learn something from the long history of mankind.

Thank you for your visit to our museum.



Map of associated sites



展示資料一覧

1. プロローグ

遺跡名	所在地	点数	主な展示資料	備考	所蔵機関
周口店遺跡	中華人民共和国 北京市	2	大型スクレイパーなど	レプリカ	東北大学大学院 文学研究科
観音洞遺跡	中華人民共和国 貴州省	1	(ルヴァロワ技法) 石核		
水洞溝遺跡	中華人民共和国 寧夏省	2	エンドスクレイパーなど		

2 後期旧石器時代のはじまり

笹山原No.16遺跡	福島県 会津若松市	10	台形様石器・局部磨製石斧など		郡山女子大学短期大学部
砂間遺跡	長野県 上水内郡信濃町	1	局部磨製石斧		東北大学大学院 文学研究科
杉久保遺跡	長野県 上水内郡信濃町	1	台形様石器		
磯山遺跡	栃木県 真岡市	15	台形様石器・局部磨製石斧など		

3. 石刃技法と非石刃技法の展開

上三野A遺跡	山形県 新庄市	3	石刃核など		東北大学大学院 文学研究科
高倉山遺跡	山形県 最上郡舟形町	16	ナイフ形石器・石刃など		
白山E遺跡	山形県 新庄市	16	ナイフ形石器・彫刻刀形石器など		
杉久保遺跡	長野県 上水内郡信濃町	5	ナイフ形石器・彫刻刀形石器など		
馬場平遺跡	長野県 南佐久郡南牧村	10	尖頭器など		
上三野A遺跡	山形県 新庄市	14	ナイフ形石器・剥片尖頭器など		
岩戸遺跡	大分県 豊後大野市	12	ナイフ形石器・剥片尖頭器など		
国分台遺跡	香川県 高松市	8	国府型ナイフ形石器など		
ジングルヌル遺跡	大韓民国 全羅北道	6	剥片尖頭器など	レプリカ	

4. 細石刃石器群の出現と展開

矢出川遺跡	長野県 南佐久郡南牧村	14	細石刃・細石刃核など		東北大学大学院 文学研究科
荒屋遺跡	新潟県 長岡市	35	細石刃・彫刻刀形石器など		
タチカルシュナイ遺跡群	北海道 紋別郡遠軽町	22	細石刃・細石刃核など		
ホロカ遺跡	北海道 紋別郡遠軽町	2	石刃		
マグレモーゼ遺跡	デンマーク シェラン島	3	細石刃をはさんだ骨角器など		

5. 土器の出現と縄文時代への移行

田沢遺跡	新潟県 十日町市	9	土器・尖頭器・局部磨製石斧など		東北大学大学院 文学研究科
福井洞穴遺跡	長崎県 佐世保市	28	土器・細石刃・細石刃核など		
虎頭梁遺跡	中華人民共和国 河北省	18	細石刃核・尖頭器など	レプリカ	
モサナル遺跡	北海道 上川郡下川町	11	彫刻刀形石器・両面加工石器など		
小瀬ヶ沢洞窟遺跡	新潟県 東蒲原郡阿賀町	20	土器・石鏃・彫刻刀形石器など		
津谷遺跡	山形県 最上郡戸沢村	3	尖頭器・有舌尖頭器など		
中林遺跡	新潟県 十日町市	15	尖頭器・有舌尖頭器など		
タチカルシュナイ遺跡群	北海道 紋別郡遠軽町	6	有舌尖頭器・舟底形石器など		
野川遺跡	仙台市 青葉区	7	両面加工石器・スクレイパーなど		
		4			

6. エピローグ

岩戸遺跡	大分県 豊後大野市	4	コケン形石偶・石偶の材料		東北大学大学院 文学研究科
福井洞穴遺跡	長崎県 佐世保市	3	石製品・土製品(有孔円盤)		
野川遺跡	仙台市 青葉区	1	有溝砥石		

東北大学大学院文学研究科・東北大学総合学術博物館 地底の森ミュージアム共催企画
企画展 「アジアのなかの東北日本旧石器時代」 展示図録

初版：2016年10月31日

執筆・編集・発行

東北大学大学院文学研究科
東北大学総合学術博物館・同学生スタッフ
仙台市富沢遺跡保存館 地底の森ミュージアム

